

島木赤彦

万葉集の鑑賞及び其の批評



島木赤彦（しまぎ あかひこ）

1876年長野県諏訪に生る。本名久保田俊彦。

1898年長野尋常師範学校を卒業。小学校教員を経て1914年上京，雑誌「アララギ」の編集責任者となる。歌集に『切火』『氷魚』『太虚集』『十年』『柿蔭集』，合著歌集『馬鈴薯の花』，歌論集『歌道小見』等。1926年没。

万葉集の鑑賞及び其の批評

島木赤彦

昭和53年2月10日 第1刷発行

昭和57年4月28日 第4刷発行

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話・東京(03)945-1111(大代表)

振替・東京8-3930

装 幀 蟹江征治

レイアウト 志賀紀子

印 刷 株式会社廣済堂

製 本 株式会社大進堂

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

ISBN4-06-158245-3

(術E)

万葉集の鑑賞及び其の批評

島木赤彦

講談社学術文庫

『万葉集の鑑賞及び其の批評』の成立過程

『万葉集の鑑賞及び其の批評』の出版は、父赤彦の死の前年の五カ月前に当る大正十四年十一月であつた。従つて赤彦の生存中の最後の著書であり、永年にわたつて研究した万葉集の真価を表現しようとして蘊蓄を傾けた究極の書でもある。

赤彦が初めて万葉集を読んだのは、師範在学中であつたという。明治三十二年、作者二十四歳の時、新任地の長野県北安曇郡池田会染小学校で、教え子北条伝の死を弔つた

大みねの山たちわかれ行雲を汝にたぐへて見るぞ悲しき

の歌について、斎藤茂吉氏は赤彦記念号のアララギ誌上で「大みねの山たちわかれ、の歌の如きはその哀韻はやはり人麿声調にかよふものがある」と述べている。

元来、アララギ派の歌人たちが作歌の基礎を万葉集においたのは、子規以来の伝統であつた。赤彦はその後万葉の研究を続けながら作歌していたが、生涯の為事として万葉集の研究を発念したのは、晩年に近い大正八年ごろであつた。

同年十月慶応義塾図書館で「万葉集の系統」と題して講演をした。これは万葉集の本質を伝える伝統は短歌の基礎をなすものであり、同時に作歌制作の根本をなすものであるとしたからである。しかし万葉集に作歌の根本をおくとしても、これには万葉集の正しい訓みと解釈とが必要であり、正しい訓みなくしては正しい解釈はあり得ないし、また正しい解釈なくしては鑑賞も批評もあり得ないと感じたからであつた。更に赤彦は大正十一年三月万葉集叢書刊行のため上野図書館に通つて、古写本の筆写を始め、また同年十月、京都帝国大学図書館に通つて、万葉集に関する古書を渉獵し、万葉集新点を筆写した。そうして『万葉集僻案抄』などの万葉集叢書を刊行したのであつた。

赤彦の最後の命脈をとつた斎藤茂吉氏は遺族の者に向かつて、『万葉集の鑑賞及び其の批評』は前編が出たのであるから、後編の原稿があるだろう。赤彦は万葉集中から五百四十五首を選び出し、そのうち二百六十五首を前編に収め、残りを後編にすると云つてゐる。残りの歌があつたら見せてほしいものである」とすこぶる真剣な氣構えで問うたものであつた。結局、後編の原稿はなかつたが、この斎藤氏の質問は、赤彦のこの書が万葉研究者ないしは万葉集に根拠をおく作歌人にとっていかに重要な意義をもつものであつたかを如実に示唆したものであると言えよう。

昭和五十二年十月八日

久保田健次

序　　言

ここに説こうとするは、万葉集の文学史的考察でもなく、訓詁釈義の研究でもなく、単に、万葉集中の歌例によつて、万葉集の一部を鑑賞しようとするに過ぎない。

小生らは、歌の上に常に万葉集を宗としてゐる。それは、万葉人の歌い方が、常に真実な心の集中からなされ、現れるところは緊張の声調、高古の風格となつて、われわれをして常に頭をその前に垂れしめるからである。小生は、自ら喜んでその前に頭を垂れるというような対象物が、われわれの面前に存在することを幸福と思つてゐる。本書は、その感謝の心の一部を具体的に記述するものとみてもいい。記述の前に、万葉集に対する一般小見を簡単に書いてみる。

小生は、歌を作すほどの人は、誰でも万葉集の心に始終すればいいと思つてゐる。万葉集の心は、われわれが歌に入る第一歩の心であらねばならぬとともに、歌に果てんとする最終歩の心であらねばならぬと思つてゐる。それほど、万葉集は歌の命を正しく深く豊かに盛つた歌集である。

それならば、万葉集の歌の命とするところは如何なるところにあるか。それは、第一に自己の眞実に徹しているという点にある。歌の命が、作者の眞実性と始終するというほどのこと、作歌者の誰でも承知している平凡事であるが、その平凡は、われわれが日々に浴している日光の平凡にして貴重大切なものがごときものである。日光が生物の命と始終するごとく、眞実は歌の総べての正しき生長と始終する。

今の世は、人間が増殖して、人と人との接触が多いために、生活精神が多方に分岐して、分岐の個々に力が薄く、力の薄い個々が一点に集まって強大な力となることも少なく、一面、社会的興味に伴う世間気ともいうべきものが割合に多く発達して、個々独自の根柢所に徹して生活するという風な心持が稀薄になっている。歌がやはりそれであつて、今の人の作す歌は、往々にして力が薄く、その上、ともすると、世間気が多く交じつてくる。

つまり、世間の流行とか嗜好とか、批評評判とかいうものを目安に置いて歌を作るから、自己内心に湧き来る眞情に直面して、専心にその眞情に即こうとする執意を疎かにする。それゆえ、作すところの歌が底力を備えて、惻々として人を動かすほどの権威を持ち得ないのである。

これは、また、一面からは今世人の過度なる理智の発達とも關聯している。今世人は理智の力をもつて、容易に敏速に芸術に唱えらるる主義主張の輪廓を知り得る。容易に知り得るところを目安として、早く自己の芸術をそれに当て嵌めようとするから、その間に上滑りや

輕薄が伴い易いのである。

理智の理解と眞の到達との間には時間があり、距離がある。距離と時間とを省略して到達を簡便にしようとするところに今世人の弱所があるのであつて、今の世にある多くの歌が、多く底力を欠くのは、如上の事情から、どこまでも自己の眞実に即こうとする根強さを疎かにするためであらうと思われる。

そういう弊所をもっている今世人であるから、徹頭徹尾自己の眞実に始終している万葉集の歌に接して、これを親愛し、これを尊敬して、居常その薫化と保育を受けることは、われわれ歌人に最も必要なことと思うのである。

元來、理想は單なる理想として考えられるよりも、それが具体的な現れとなつて示されるとき、鮮やかにわれわれの感動を刺戟する。万葉集は、歌の根本義としてわれわれの希求するものの一大具現であり、特に、それがわれわれ上古祖先の所産であつて、その中にわれわれの血液の源泉が鮮やかに見出されるのであつて、それによつてわれわれの感受を常に新鮮にすることは、同時に自己の性命を新鮮に保つことになるのであつて、かかる歌集が千余年後のわれわれに貽されてあることは、大なる仕合せとせねばならぬのである。

眞実は、また、その一面が素樸率直となつて現れる。万葉集の歌、特にそのうちの前期ともいうべき時代の歌は、いかにも素樸率直な歌が多くて、子どもの無邪氣な口つきから出る言葉や、地駄々々を踏んで泣き叫ぶ声を聞くごとき感じを与える歌が多く、それがいずれも

自己の真実に根ざしているから、いささかの厭味を交えないのである。

この期の歌は、多く喜怒哀楽というごとき単純な感情が歌われ、その感情が純粹一途に集中しているから、作者自ら知らざるに、おのずから人生の機微に参し得ているというような快い境涯がある。句法に繰返し多きは、子どもと言語に繰返し多きに似、一語々々の響きにも訥々たる幼さがある。

万葉集の中期に入ると、歌が追々芸術的に進んできて、中に、柿本人麿・山部赤人のごとき大きな歌人を出して、それらを中心として生れた当時の歌の中には、芸術としての至上境と思われるところにまで入っているものがあるのであるが、それらの歌が、いずれも素樸さや率直さから離れていないのであって、つまり、自己の真実に徹して歌われているから、至上境として真の力を持ち得るのである。

この期の歌は、初期に比べると、歌の範囲が人事自然の各相にわたって拡がり、しかも、それが豊かに満ち高く張って、芸術の要求する崇高性、厳肅性というごときものを持ち得て、あるものは円融具足の相に入り、あるものは暢達流動の相となり、あるものは高邁、あるものは蒼古、あるものは明澄、あるものは沈潜の姿となって現れているのである。

後期に入れば、中期の芸術的方面を更に芸術的に押し進めている人々が現れるとともに、万葉の素質的方面から離れはじめるという現象も伴い、それらの人々には理智的な観念的な歌がぼつ／＼目につき、後に現れる古今集の歌風などへの橋渡しをするという観があるけれ

ども、だいたいにおいては、やはり、万葉集の真髓を捉えて中期の歌風を継承したというべきであつて、全篇四千五百首の歌、多くは、われわれの尊敬すべき命をもち得るにおいて充分である。

すなわち、われわれが万葉集を仰望するのは、単に真実性の現れなるが故とのみでは尽しておらぬのであつて、それらの素質を押し進めて、芸術の至上所に到達せる歌の種々相から深い感銘を受けているのである。これは具体的挙例によつて説くことにする。

元来、万葉集は、仁徳天皇御宇から淳仁天皇御宇天平宝字三年に至る四百五十年間の歌を輯めたものであるが、舒明天皇以前のもものは極めて少ない。舒明以後のものを三期に分ければ、舒明より天武に至る約五十年間が前期であつて、主として明日香地方に朝廷のあつた時代である。それから、持統・文武両帝約二十年間が中期であつて、主として藤原に朝廷のあつた時代であり、万葉集としては歌の最も頂上に到達した時である。それから以後は奈良朝といわれる時代になるのであつて、元明より淳仁に至る約五十年が後期になるのである。

第一期にはいまだ特別な歌人といわれる人が出ておらず、第二期に入つて前記人麿・赤人のとき代表的歌人が出ており、第三期には山上憶良・大伴家持などの代表的歌人が出ておるが、この期の代表的歌人は、いずれも人麿や赤人に比すべき歌人ではなく、かえつて無名の作家、例えば、関東から西陲の守備に遣された防人などの歌に生き／＼したものが見えており、狭野茅上娘子のごとき一少女の歌に痛切な叫びが聞かれていたという有様である。

以下歌例によつて前期・中期・後期の歌の大体を説こうとする。しかし、これは、大きな為事しごとであつて、各期における代表作ことごとくを説くことは、今ここにはなし難い。心付いたものをぼつ／＼と拾つてゆき、それによつて、各期の面影を髣髴はうふくさせることができ、かつ、それらを綜合そうごうして、万葉集の性命の一端を現し得れば幸いである。

序ついでをもつていえば、万葉集の歌は、ことごとく正確には今日に伝わっていない。それは、奈良朝以後世々書写をもつてこの本を伝えたのであるから、筆写の際に誤りがあるのみならず、その誤りある写本も、平安朝末期ごろを最古として、極めて僅少のものが今日に伝わっているのみであつて、諸本を校合して正否を定めるに便でない。ただ、鎌倉時代中葉ちゆうように僧仙覺せんかくが出て、十数種の諸写本を校合して、文字を正し、訓点くんてんを施ほどこした。それが今日万葉集の原拠げんきょとなつていたのであるが、その仙覺本さえも正しくは今日に伝わっていない。

徳川時代の学者の拠よつていた本は、仙覺本と他本との交錯こうさくがあつて、正しい仙覺本に拠つたものとはいわれない。かような事情から、万葉集中のある歌は、今もつて文字及びその訓点のいずれとも決し難いものがある。

今私の説とこうとするのは、それら訓詁くんごの問題にわたろうとするものでなく、古来学者の釈義しやくぎを挙げて研究を進めようとするものでもない。それらは、すべて他日にゆずる。以下述べるもののうちにも、訓詁釈義の上に問題のあるものがあるであろう。それは諸本や諸訓を考へ合せた上、小生一人の考えをもつて採択した訓義であると承知して頂きたい。

目次

『万葉集の鑑賞及び其の批評』の成立過程	3
序言	5

万葉集前期の歌	31
---------	----

1	小草壯丁と小草助壯丁と	31
2	児毛知山若楓の	34
3	下毛野安蘇の川原よ	36
4	高麗錦紐とき放けて	37
5	烏とふ大をそ鳥の	38
6	稻舂けば輝る我が手を	39
7	麻苧らを麻笥にふすさに	40
8	吾が面の忘れむ時は	41

9	防人 さきもり に立ちし朝 あさ けの………
10	汝 な が母 はは に嘖 こ られ吾 あ は行く………
11	青柳 あをやなぎ のはらろ川門 かはと に………
12	彼 か の子 こ ろと寝 ね ずやなりなむ………
13	馬柵 うませ ごし麦食 むぎは む駒 こま の………
14	あり衣 ぎぬ のさゑさゑしづみ………
15	天 あま の原 はら 富士 ふじ の柴山 しばやま ………
16	面白 おもしろ き野 ぬ をばな焼 や きそ………
17	足柄 あしがら の彼面 そむこ 此面 こも に………
18	筑波嶺 つくばね の嶺 ね ろに霞 かす みる………
19	多胡 たこ の嶺 ね に寄 よ せ綱延 つなは へて………
20	斯 か くばかり恋 こ ひつつあらずは………
21	秋 あき の田 た の穂 ほ の上 へ に霧 き らふ………
22	一日 ひとひ こそ人 ひと をも待 ま ちし………
23	夕 ゆふ されば小倉 をくら の山 やま に………
24	吾 あ が背子 せこ は仮廬 かりほ 作 つく らす………
25	家 いへ にあれば筈 け に盛 も る飯 いひ を………
61	
60	
59	
57	
55	
54	
53	
52	
51	
50	
50	
48	
47	
45	
44	
44	
42	

26	吾はもや安見児得たり	63
27	三輪山を然かも隠すか	64
28	良き人の良しと能く見て	66
29	茜根刺す紫野行き	67
30	朝霧に霑れにし衣	68
31	渡津海の豊旗雲に	69
32	玉きはる内の大野に	71
33	衣手に取りとどこほり	72
34	畏きや天の御門を	73

万葉集中期の歌

35	足曳の山川の湍の	75
36	み食向ふ南淵山の	78
37	敷妙の袖易へし君	79
38	小竹の葉はみ山もさやに	82
39	青駒が足搔を早み	83

56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40
ぬば玉の夜さり来れば	巻向の山辺とよみて	八雲さす出雲の子らが	こもりくの泊瀬の山の	大君の遠の朝廷と	名細しき稻見の海の	飼飯の海の庭よくあらし	玉藻苅る敏馬浦を過ぎ	さざなみの大津の子が	さざなみの志我津の子らが	石見のや高角山の	嗚呼児の浦に船乗りすらむ	天の海に雲の波立ち	古にありけむ人も	東の野に陽炎の	淡海の海夕浪千鳥	去年見てし秋の月夜は
95	94	94	93	93	93	92	92	92	92	92	91	89	88	86	84	83

73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57
心には千度おもへど………	恋ひ死なば恋ひも死ねとや………	恋ひ死なば恋ひも死ねとや………	他人の寝る熟睡は寝ずて………	高山の峰ゆく鹿猪の………	思ふにしあまりにしかば………	真十鏡手にとりもちて………	ぬば玉の昨日の夕………	我が背子に吾が恋ひ居れば………	大船の香取の海に………	健男の現心も………	行けど行けど逢はぬ妹ゆゑ………	巻向の檜原もいまだ………	秋山の紅葉が下に………	天の河水隠草の………	泊瀬川夕渡り来て………	紅葉の過ぎにし子らと………
103	103	103	103	102	102	101	101	100	100	99	98	98	97	96	96	95